2023年6月11日（聖霊降臨後第2主日、特定5、A年）

牧師メッセージ

「お前たちの愛は朝の霧」

（マタイによる福音書 9:9-13）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスは今日の福音の中で、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と言われました。ここで言われている病人も罪人も、癒しを求めている人間のことだと言えるでしょう。それは具体的に、当時の律法の基準で共同体から排除されるべき病とされた人や、律法学者やファリサイ派が重んじた「律法」を守ることができず罪人とされ、この世界から居場所を奪われた人々でした。徴税人マタイもまた、そのような人間でした。徴税人は支配国ローマの手先となって、同胞から税を集める役割を担っていました。その役割を得るために多額の投資をしたため、徴税人は必要以上のお金を取り立て、その投資を回収する必要があったともいわれます。さらに悪い徴税人は、多額の取り立てをして私服を肥やすような者もいたようです。徴税人は異邦人に支え、異邦人との交わりによって祭儀的にも不浄であるともされ、これもまた彼らが嫌われる要因となっていました。律法学者やファリサイ派の人々は、これらの人々と関わることを避け、自分たちの正しさを保てるようにしました。もちろん、一緒に食事をするなど考えられません。しかし、主イエスはこれらの人々と食事を共にしました。そして神からの「極めて良い」という宣言と共に、神の愛を伝えました。癒しを必要とし、枯れた命を生きていたその人々に、主イエスとの交わりによって、生きた水、命の水が注がれたのです。

自分たちは正しい、病人ではないと自負し、行動していた律法学者やファリサイ派の人々は、その食卓の光景を見ても、愛を見出すことはありませんでした。それどころか、「なぜイエスという男は、徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と、イエスを咎めようとしました。本当の意味で神と交わったのは、「病人」や「罪人」でしょうか。それともファリサイ派の人々でしょうか。答えは明確です。

今日のホセア書にこうあります。

「お前たちの愛は朝の霧 すぐに消え失せる露のようだ。」

ここで「愛」と訳されている単語は、「ヘセド」というヘブライ語です。ファリサイ派の人々のヘセドは、朝の霧のように、すぐに消えてしまうようなものでした。主イエスは今日の福音で、豊かな食卓の交わりを通して、そんな彼らにも神のヘセドを明らかにしました。これから先は、ファリサイ派の人々次第です。自分は正しいとして生き続けるのか、それとも罪人として主の食卓に招かれるのか。さあ、わたしたち自身は今、どのようにこの礼拝に参列しているのでしょうか。自らを省みつつ、み言葉に聴きたいと思います。